

を一段抜きで降り、学校を後にする。あたしは怒っていた。足がどんどん早くなる。かけ出したい気分になる。

ようやく、待てよ？ という気分になったのは、握りしめた手が痛かったから。

ちょうど信号で足止めされたので、手を開いてみた。いびつな形の石が出てきた。すっぽりと手のひらにおさまるぐらいの石。形は変。高浜偉生たかひなゑいせいぐらい、変。だけど、表面が艶やかで何とも微妙な色合い。ふいに雲の隙間から日が差し、きらきら光った。きれいだね、と玲美がいった、その石。

冷静に考えてみると、なんであたしが怒る必要があるのだろうか。

冷静に考えてみると、あたし、コクられたってこと？ 冗談やめてくれ。

だが、冷静に考えなくても、偉生が冗談であんなことをいうヤツじゃないことはわかる。

コクられたんだよ。生まれて初めて。これまで、男気になかったあたしが。

問題は、それがなぜ、偉生なのか、ということ。もとより、三浦翔平みたいな美形にコクられると思うほど身の程知らずじゃない。だけど、偉生だよ。異星人だよ。あたしにだって、多少は望みってものが……これは、希望を切り捨てた罰だろうか。

ようやく、自分の怒りの正体が見えてきた。仮に、偉生の行為が真面目だとする、いや真面目なんだ、あいつはいつだって。だが、あんな風に、人のたくさんいる教室で、他人に聞こえるようにいうことか？ コクるなら、それなりの作法でもんがあるだろう。

悪い夢を見たと思いたかった。けれど、次の朝、教室では、その話題で持ちきりだった。あたしは、不機嫌そうに「あたしにだって、選ぶ権利がある」といい、一切を黙殺することにした。

幸いなことに、それからすぐに期末試験に突入した。まがりなりにも受験生。その手の話題は潮が引くように後退していった。

試験が終わって数日後。理科と数学の試験で偉生がトップだったことがわかる。それもあって、再び、偉生があたしにコクったことが話題に上る。当の偉生はといえば、それが驚くべきことに、クラスメイトたちのからかいにも無反応で、あたしへの態度は、その前後でまったく変化がなかった。

こいつは偉大なのか、鈍感なのか。

夏休みが嬉しいというのでなく、ほっとすると思ったのは、初めてだった。